

カギュー派の典籍と教義

——トウカン『一切宗義』カギュー派の章概説——

立川 武蔵

カギュー派の典籍と教義

「カギュー」bka' bryud と今日呼ばれている学派は、相互には人物的交流のほとんどない二つの学派の総称である。その二つとは、キムン[※] Khyung po (990—1139) を祖とするシャンブ・カギュー Shangs pa bka' bryud 派とマルブ・ロツマールワ・チューキロアマー Mar pa Lo tsā ba Chos kyi blo gros (1012—1097) より続いている派とである。後者は、「マルブ・カギュー」とも呼ばれることもあるが、マルブの孫弟子にあたるタクボラジエ Dwags po lha rje (1079—1153) の名を取って「タク

ポ・カギュー」と呼ばれることが多い。これは、マルブから続く伝統がタクボラジエによって強大な社会的勢力を有する教団に成長したという歴史的事実を反映するものと考えられる。そもそも「カギュー」bka' bryud という名称は師から弟子へと伝えられる密教教説のどのような「伝統」をも指すのである。したがって、「ゲルク派のカギュー」と言うことは可能である。シャンブ・カギューとタクポ・カギューは、後世のその思想内容および実践形態の近似性の故に、トウカンの『一切宗義』におけるように、「カギュー派」と総称されるに至ったと思われる。^(一)

カギュー派はサキヤ派、カダム派などとはほぼ同じ時代に成立し、後に成立したゲルク派とはしばしば反目、抗争した。その教理・実践形態は、チベットにおける最も古い宗派であるニンマ派（古派）と類似したものであった。もともと「ニンマ派」という名称は、統一された組織・教義体系を有する、ゲルク派のような教団を指すわけではない。「ニンマ派」と呼ぶことのできる、まとものある一つの教団は存在しなかったと言っても過言ではない。「ニンマ派」とは、幾つかの類似した系統の総称なのである。カギュー派もまた単一な教団ではなく、『一切宗義』に従えば九つの派に分れ、そして互いに抗争した諸々の教団群である。それらの教団のほとんどはそれぞれその土地の豪族に支えられたいわば氏族教団であった。それぞれの氏族は自らの勢力の拡張のためにカギューの諸々の分派を利用した。氏族間の抗争はしばしばカギュー派以外の学派との反目のみならず、カギュー分派の争いともなっており現われた。十四世紀中葉にはカギュー派の一派（バクモトウ派）が中央チベットおよびツァン地方を制圧し政権を把握するが十五世紀末にはその勢

力を失った。十八世紀末までにはわずかな分派を除いてほとんどが亡んでいる。そのわずかな分派（カルマ、ドゥクなど）は、しかしながら、今日、ラダック、北インド、ネパール、シッキムなどに生きつづけており、特にカトマンズ盆地においては、最近、復興の兆しすら見せている。以下、トゥカンの『一切宗義』*Gyub thal shul gyi me long*（以下 GSM と略す）の「カギュー派の章」に従ってカギュー派の諸師、その著作、思想を簡単に述べてみたい。⁽²⁾「カギュー派の章」はゴンレン版で三十四葉、シヨル版で二十八葉である。⁽⁴⁾以下、引用個所の頁数はゴンレン版による。「カギュー派の章」は、(一)カギューの分派の形成、(二)それらの見解・実践形態、および(三)カギューの見解等に対する著者トゥカンの批判、評価の三節に分れる。ここでは、紙面の都合上、(一)の内容に従いつつカギュー派の教義に関しては簡単に触れたい。⁽³⁾

二

トゥカンはカギュー派をシャンパ・カギューとタクポ・カギューの二派に分け、まず前者を説明する。シヤ

ンパ・カギューの祖師キェンポはネパールとインドに幾度も行き多くの師に就いた。その師たちの中に密教行者マイトリーン、*Mai tri pa* が居たことは注目すべきである。またキェンポは「ニグマ *Ni pu ma* の大法」と呼ばれる行法を学んだと言われるが（GSM, カギュー派の章 3a, 4）、ニグマはインドの密教行者ナーローパ、*Nā ro pa* の「妻」あるいは宗教実践上の女性、*パートナー*と言われた人物である（GSM, 3a, 5）。ナルパもマイトリーンに就き、更にナーローパにも就いたと伝えられる（GSM, 4b, 6）。このように、インドにおける「法の源泉」の近さは、この一応独立した二つの系統が「カギュー派」という一つの名称で呼ばれることになった一つの理由である。

キェンポはシャン *Shangs* の土地において活躍した。超能力者であったらしく多くの逸話が残されている（GSM, 3b, 2-4）。彼の著作集は残されておらず、彼の思想の全体像はまだ把握されていない。⁽⁶⁾ トゥカンによれば彼は「ニグマの六法」、「幻道次第」、「不死幻輪」、「大印契カウマ」、更には亥母や金剛手尊の観想などを通じて

いた（GSM, 4a, 6-4b, 1）。「大印契カウマ」とは「大」樂と空性を「ちようど籠の上下の」口を合わせ閉じたことのように、無差別であると観想することにより、光明を眼のあたりにする「ための」教誡であって、タクポ・カギュー派の大印契と要は同じと思われる（GSM, 4a, 2-3）。彼はまた勝 樂、呼金剛、大 幻、秘密集會、鑿相金剛の五つのタントラにも詳しくあった（GSM, 4a, 5）。チベットにおけるマンダラ理論の集大成『タントラ部集成』*Tgyud sde kun bris*, No. 120 はキェンポ流のマンダラである。その特徴は先述の五タントラのそれぞれのマンダラが十文字形に配置されて一つのマンダラを形成していることである。タクポ・カギューは主として勝樂、サキヤ派は呼金剛、ゲルク派は秘密集會と言うように、タントラ間の相違を強調してそれぞれの学派の特徴を表現しようと努めたチベット密教の流れの中で、キェンポは五つの無上ヨーガ・タントラのマンダラを一つに収めて総合を計ろうとしたと考えられる。⁽⁷⁾

キェンポの弟子の中ではモクチョクパ、*Imog loog pa* が重要である。彼の系統には後継者が多く出ており、後

世ジャク Tag とサム dSam の二派に分れた (GSM, 4a, 1)。ジャク派のジャクチェン・チャムパベル Tag chen Byams pa dpal にはゲルク派の祖ツォンカパがシャン派の法を聴き、同じくジャク派のミニューチェン Mus chen にはケードゥプジェが六臂自在天の法を聴いた⁽⁸⁾と伝えられる (GSM, 4a, 2-3)。確かにシャンパ・カギューは後述するタクポ・カギューのいくつかの分派のように社会的、政治的勢力を有しはしなかったが、「後世の大方者タントンゲルポという人もシャン派の法統を守る者であるようだ」(GSM, 4a, 4)とトゥカンが述べるように⁽⁹⁾、シャンパ・カギューの法統は後世まで守られたようである⁽⁹⁾。

三

第二のタクポ・カギューの祖マルパは、ドクミ・ロツアロー Brog mi Lo tsa ba に梵語を学んだが、キェンポと同じくインド、ネパールに行き、ナローロパ、マイトリパに就いた (GSM, 4b, 6)。マルパの翻訳した多数の典籍が『西藏大蔵経』に収められているが、彼自身

のまとまった著作は伝えられていない。このカギュー派の祖は父・母無上ヨーガ・タントラに通じていたと思われる。彼は僧院の中に住む学僧ではなく、妻帯し、民衆に近く生活しながら仏教を広めていった。後世のカギュー派の或る分野と異なって彼は豪族の保護を受けず、大きな僧院を建立しようとしなかった⁽¹²⁾。

マルパの多くの弟子の中、主要なものは、メー Mes' yuk n'gog' ツル m' tsur' とミフローパ、Mi la ras pa という「四柱」であるが、最初の三人から「秘密集会、勝樂、呼金剛、四座、大幻タントラ等の灌頂とタントラの註釈が広く流布した」(GSM, 5a, 3-4)。マルパの弟子の中、最も重要な人物は、しかしながら、ミラレーパである。彼の青春は彼の家族を襲った不運に対する噴りに満ちたものであった。父の死後、彼の家、財産を奪った親類の者たちに彼は呪術を学んで凄惨なまでの復讐をする。多数の人を殺してしまったことを悔いて山にこもった彼が物乞いに村に下りてくると村人に石を投げられる。たまりかねたミラレーパが再び呪術を使うぞと彼らを威す場面を、ミラレーパの伝記は描いている。「罪を

犯した」ミラレーパは師マルパに会い、烈しい精進と苦行と共に観想法を続けた。彼は哲学的体系を造りあげるような学僧ではなかったが、ヨーガ等によって内的な証解を求め、マルパと同様、豪族の保護を求めず、人気がない山中で暮した。ミラレーパの自伝詩とも言うべき『十万歌謡』 m' Gur' bum は彼の生涯を美しい文体で物語っており、チベット文学の傑作である⁽¹³⁾。後世、幾人かの者が彼の伝記を書いた⁽¹⁴⁾。劇的な青春時代を過し、生涯、山中にあって修行し、権力を遠ざけた彼の姿は今日なおチベット人の中に行者の典型として生きており、白描やタンカの最も好まれる題材の一つである。こうしたマルパやミラレーパの態度は、後世、タクポ・カギュー派が政治的権力と結びついた後でも、「狂者⁽¹⁵⁾」と呼ばれる人々の生き方の中に伝えられていったと思われる⁽¹⁵⁾。

四

ミラレーパの弟子の中では、「太陽のような」タクポラジエ Dwags po lha rje と「月のような」(GSM, 5b, 2) レーチュンパ Ras chung pa の二人が重要である。後

者は無体空行母の法類を求めて「ナローロパとマイトリパの直弟子」(5b, 4)と伝えられるティンパ Ti phu pa に請うた。インドで新しい行法を学びチベットに帰ったレーチュンパは師ミラレーパに尊大な態度を取った。思い上った弟子を師が超能力によって諫める場面が『十万歌謡』に見られる⁽¹⁶⁾。ミラレーパはゲンゾン・トンパ Ngan rdzong ston pa に教誡を与えるが、この者からは勝樂タントラの伝統が広まり、また一方レーチュンパ自身からも「レーチュン聴聞の伝統」が伝えられた (GSM, 5b, 5)。マルパ、ミラレーパ、レーチュンパと続いてきたいわば古いカギューの伝統は、レーチュンパ以後、カギュー派諸教団の歴史の流床の中に潜むのであり、表面的な流れとしてはタクポラジエから広まったカギュー諸派の伝統が続くのである。もともとタクポラジエの弟子の中でも、カルマ派の祖トューヌムケンパ Dus gsum mkhyen pa のように、レーチュンパに法を聞いた者も居り (GSM, 5b, 5)、実際にはタクポラジエの伝統とレーチュンパのそれとは複雑に入りこんでいるが、タクポラジエおよびその弟子たちによってマルパの伝統

は大きく変化し、巨大な教団組織を有し地方の豪族の政治勢力と結びついた。「カギニュー派教団」と呼べるような組織もタクポラジエ以後出現したのである。

タクポラジエ——ガムポパ、sGam po paとも呼ばれる——は若い時、医者となったが、妻をなくした後、カダム派のシャフリンパ、Sha ba gling paより具足戒を受けた。⁽¹⁸⁾その後、チャユルパ、Bya yul pa、ニユクルムパ、Snyug run pa、チャタリ、コンカパ、[Cags ri Gong kha pa 達からカダム派の法を聴いた (GSM, 6a, 1—2)。その後、タクポラジエはミラレーパに会い教誡を授けられた。「タクポラジエは」カダム「派」の道次第とミラレーパ」の大印契の教誡を一つに合わせて『道次第解脱莊嚴』*Lam rim thar rgyan* を造られた。⁽¹⁹⁾ここに始めてカダムと大印契という二大河が合流したのである」とトゥカンは述べている (GSM, 6a, 3—4)。

『道次第解脱莊嚴』はその名が示す通り、カダム派の祖アティーシヤ達が好きで用いた道次第のジャンルを有しており、マルパ、ミラレーパ、レーチュンパに伝えられてきた伝統とは明らかに異なった傾向を有する。トゥカ

ンの言うようにこの書の中で大印契も扱われているが、それはハタヨーガによる精神生理学的な考察と実践ではなく、むしろ中観派の説く空性に近いものである。⁽²⁰⁾そもそもタクポラジエがミラレーパの許に居たのはわずかな歳月のことであって、レーチュンパのようにミラレーパとの師弟関係が長い年月に亘って続いたわけではなかった。ガムポパのこのようなカダム派的、あるいは顕教的要素は後世のカギニュー派の歴史に多大な影響を与えた。

マルパからレーチュンパに至るいわば初期カギニュー派の時代は終り、タクポラジエ以後カギニュー派は中期(十七世紀中葉まで)に入る。この「中期」はカギニュー派内部およびゲルク派などの相剋が激化した時代ではあったが、カギニュー諸派活動も最も盛んな時でもあった。

タクポラジエの直接・間接の弟子たちはそれぞれ多数の分派を生んだ。トゥカンは『一切宗義』はタクポラジエに従う者たちとして次の九派を挙げている (Ga, 5—5b, 1)。

- (一) カルマ Karma 派
- (二) パク [モ] ツァ Phag [mo] gru 派
- (三) ツァル Tshal 派

(四) ディクン 'Bri gung 派

(五) アウク 'Brug 派

(六) タクルン Stag lung 派

(七) バンロム 'Bab rom 派

(八) ヤモサン g-Ya' bzang 派

(九) アブ Khro phu 派⁽²¹⁾

五

第一のカルマ派は、バクモトゥ派のようには氏族の政治・経済の道具とならず、しかもカギニュー諸派を代表する存在であった。ゲルク派との激しい抗争の後、勢力は衰えたが、今日もなおインド北部、ネパールなどの地において活動を続けている。この派の祖師はタクポラジエの高弟トウースムケンパである。彼はアティーシヤの弟子ヨル・チュエワン Yol Chos dhang やシャラフ Sha ra ba よりカダムの法を、チャパ・チュエキセンゲ Phya ba Chos kyi seng ge からは中観や論理学を学んだ (GSM, 6b, 2—3)。トウースムケンパは、タクポラジエの場合と同様、窮極の師に会う以前はカダムの法を中

心に研究していた。三十三歳の時タクポラジエと会い、

またレーチュンパにも法を聴いている。トウースムケンパ以後、一九八一年に十六世が没するまで、カルマ派は化身相統の制度を採用してきた。この制度の成功はカルマ派が氏族の道具にならなかったこと的主要原因の一つである。⁽²²⁾

第三世ランチュンドルジエ Rang byung rdo rje (1284—1339) はカルマ派の密教教理および修習にとって

重要である。彼の『大印契祈禱』*Phyag chen smon lam* は小品であるが、カギニュー派の祈禱には最もよく用いられている。⁽²³⁾無上ヨーガ・タントラの教理を背景にハタ・ヨーガ的な修練過程を述べた彼の『微細な内的意義』*Zab mo nang don* もカギニュー派のヨーガにとって基本的な論典である。彼はまたシャマニズムの要素を多分に有する「断」(good)の儀礼にも参加していた。このようにランチュンドルジエは、タクポラジエやトウースムケンパにはそれほど濃厚でなかった二元来のカギニュー派的行法⁽²⁴⁾をカルマ・カギニューの中で定着させた。第八世シキョンドルジエ Mi bskvod rdo rje は、カルマ派の頭・密両者を

直つて重要である。彼は『人中註』の註を著し、大印契に關しても著作を残している。⁽⁸⁶⁾シキョドルジエの弟子、パオツクランテンノ dPa' bo gtsug lag 'phrengba の大部な仏教史は特にカギューの歴史に詳し。⁽⁸⁷⁾なおシトウパンチェン Si tu Pan chen の『カルマ・カギュー派史』も重要であり、⁽⁸⁷⁾カニマ派については Richardson や Douglas などの研究がある。⁽⁸⁸⁾

第二のバクモトウ派はタクボラジエの高弟バクモトウ Paug mo gru pa を祖とする。彼には弟子が多く、タクルン派やディクン派の祖は彼の弟子であった。バクモトウ派の系統であるラン Rlangs 氏に生れたシトウ・チヤンチェンゲルツェン Si tu Byang chub rgyal mtshan は、一三五四年チベットの支配者となった。バクモトウは王朝の誕生である。この王朝は第五代タクパゲルツェン (1374-1433) までが全盛であった。⁽⁸⁹⁾ゲルク派とカルマ派の抗争に際しては、バクモトウ派はゲルク派を支持した。

六

第三のツアル派の祖はシャン・ユタクパ Shang g-Yu

Ro snyoms skor drug を擲ら出した』(GSM, 14a, 6) と伝えられる。この羊派の人材は多彩であり、詩論のホエケーパ Bod mkhas pa、仏教史、曆、密教教理などに関する二十四冊の著作を残した。ノーマカル Pa Padma dKkar po、⁽⁸⁴⁾カニマシヤンニモン gTsang snyon (シトウの狂人)、⁽⁸⁵⁾ウーニモン dBus snyon (ウの狂人)、⁽⁸⁵⁾ドゥクニモン 'brug snyon と呼ばれる一見、狂人とも見える行者たちも現われた。ツァンパギャレーの後期の弟子としてロレーパ Lo ras pa とゾーシヤンパ God tshang pa が居る。⁽⁸⁶⁾後者はヤンニモン Yang dgon pa などの弟子が居り、⁽⁸⁷⁾この系統は『願船三抄』*Thar gru skor gsum* を著したバラワ Ba' ra ba が出た。彼の全集は最近復刻された。⁽⁸⁸⁾ロレーパの伝統をメ・ドゥク (下のドゥク)、グーツァンパ師弟より続く法統をトウー・ドゥク (上のドゥク) と呼ぶ。この派は今日もなおネパールなどにおいて活動を続けている。

第六のタクルン派はバクモトウの弟子タクルン・タシチンチン stag lung Thang pa chen po である。彼は幾度もインドに行こうとしたが果せず。バクモトウ

brag pa (1123—1193) である。彼はタクボラジエの弟子ムムパツルティム sGom pa tshul khrims より大印契の法を聴いてくる (GSM, 12a, 1)。彼の『白妙丸』(dkar po gcig thud) の思想はサンン著『三律儀細別』の中で批判された。⁽⁸⁹⁾

第四のディクン派はジクテンゴンポ Jig rten ngon po (1143—1217) より続く。⁽⁹¹⁾彼は若い時からバクモトウの弟子であったが、三十七歳の時、ディクンに寺を建立した (GSM, 12b, 3—6)。弟子も多く、その中の一人、父方の甥のシエルジエン Sher 'Byung はジクテンゴンポの思想を『同一意趣』*dGongs gcig* に著した。⁽⁹²⁾カルマ・ゲルク派の対立抗争の中では、ディクンはツァン地方を基盤とする側に立つことになり、中央チベットを基盤とするゲルク派に反目した。

第五のドゥク派はバクモトウの弟子リンレーパ Gling ras pa とその弟子ツァンパギャレー gTsang pa rgya ras より続く。前者の師供養儀軌 (bla ma mchod pai cho ga) は有名である。⁽⁹³⁾後者は「ノーチェン」により埋蔵経として隠されていた『等味に關する大法』

の「カニマ」大印契の悟りを得たと伝えられ (GSM, 16a, 6—6d)。後世、サンゲーオン Sans rgyas dbon po がカム地方に行き、⁽⁹⁴⁾リボチェ Ri bo che の寺を建てた以後、サンゲーオンの系統は「ヤタン Ma thang」と本家の系統は「ヤタン Ya thang」に分れた。タクルン派の勢力は、中央チベット、ツァンパカム地方に拡じた。⁽⁹⁵⁾シヤンツァン・ガワシヤン Shabs drung Ngag dbang mam rgyal は『仏教史釋有大海』*Chos 'byung ngo mshar rgya msho* を著したが、⁽⁹⁶⁾『一切宗義』カギュー派の章は、カギュー派の見解の概説を述べた。⁽⁹⁷⁾この書より多くを引用している (GSM, 20a, 3)。ツァカンがこの書を著した一八〇〇年頃には、「この法の伝統等がどのようになつてゐるのかわからなく」なつてゐた (GSM, 17b, 2)。

第七のバプロム派の祖は、「インドの密教僧」ナクポ Nag po pa の化身と云われる (GSM, 17b, 3)。バプロム・タルマワンチユク 'Bab rom pa Dar ma dbang phyug である。彼はカニマの弟子である (GSM, 17b, 4)。バプロムの寺を建立した (GSM, 17b, 5)。ツァカン

は、当時のこの学派の活動状況について「弟子の伝統を守る者はそんなに多くはなかったらしくて、現在はそのようであるかよくわからなく」(GSM, 17b, 6—18a, 1)と記している。

第八のヤサン派は、パクモトウパの弟子ケルデンイェシエーセンゲ sKai Idan ye shes seng ge を祖としている。三十八歳の時ヤサンの寺を建った (GSM, 18a, 5)。トウカンによれば當時は「本山には精舎と速功徳神と呼ばれる女神の像がある位である」(GSM, 18b, 2)。

第九のトブ派はリンポチエ・ゲルツァ Rin po che rGyal tsha とクンテンリン・パ Kun Idan ras pa 兄弟より続いている。両者ともパクモトウパの弟子である。彼らの甥がトブローフ Khro phu lo tsā ba である。彼の『興義九語』Man ngag 'bru dgu' 『秘語四十二』Snying stam bshi gsum bu gnyis などの思想は大印契のそれと思われる (GSM, 19b, 4)。トウカンの時代にはこの派の活動もほとんど止っていった (GSM, 20a, 2)。

タクボラジエからダライラマ法王国の確立までの「カギュー中期」を経て、カギュー派の歴史は「後期」に入

る。しかし、その勢力はふるわず、トウカンの時代すなわち十八世紀末には、わずかな派を除いてほとんどの分派はその活動力を失っていた。

七

サキヤ派の教義のインドにおける主要な源泉が、『ハヴァジュラ・タントラ』に基くヴィルパの思想であったように、カギュー派のインドにおける思想的源泉はインドにおける大印契であった。この思想の系統は一応カギュー派とは別のものであり、『青冊』Blue Annals においても「大印契派の章」は「カギュー派の章」と別に設けられている。大印契とは空性のハタ・ヨーガの感得と思われる。カギュー派はゲルク派のようにには精緻な論理学・認識論の体系を作りあげることなく、専ら「ヨーガによる精神的産出」としての観想法によって、窮極的真理としての「心の本質」(sens kyi gnas lugs) を体得しようとした。彼らは論理学等の理論体系にはそれほど興味を示さなかったが、『ドーハー』Do ha と呼ばれるシンボリズムの体系を尊重した。これは窮極的真理と世

界との相関係^{チキョロゾ}およびそれを直接体験する道程とを象徴的な言葉で述べたものであり、すでにインドにおいて流行していたものをマルパなどが導入した。さらにカギュー派はベンガル地方を中心とした運動であった^{チキョロゾ}俱生派と密接な関係を有した。

このようにカギュー派においては、大印契やドーハーなどのいわゆる密教的修行法と、タクボラジエ以降顕著になったカダム派的教義とが、二つの潮流となって交わるのである。前期においては、大印契やドーハーの伝統が、中期以降においてはカダム派的要素が支配的となった⁽⁴⁾。ただ中期以降においても、新カダム派とも呼ばれるゲルク派に対抗する意図もあって、大印契やドーハーの要素が表面に押し出されることもあった。ゲルク派との抗争に破れて衰微したカギュー派の一部の分派が最近復興の動きを見せているのは、はじめに述べたとおりである。

註

※ (R-) は Institute for Studies of World Reli-

gions から出されたマインツロ・フイシの番号を示す。

- (1) E.G. Smith, "Preface to the Life of the Saint of gTsan," *Satapitaka Series*, Vol. 79, New Delhi, 1969, p. 2, Note 2.
- (2) トウカン『一切宗義』に関しては、拙著『西藏仏教宗義研究(一)』東洋文庫 1974 を参照していただきたい。
- (3) 『東京大学所蔵チベット文獻目録』No. 103.
- (4) *The Collected Works of Th'u bkwan Blo bzang chos kyi nyi ma*, Vol. 2, *Gedun Sungrab Myangun Gyumshel Series*, Vol. 2, New Delhi, 1968, pp. 121—176.
- (5) 「チキョロゾ」に関しては、「カギュー派の章」の和訳解説を予定しているが、その機会に譲りたい。
- (6) M. Kapstein, "The Shangs-pa bKa' brgyud; An Unknown Tradition of Tibetan Buddhism," *Tibetan Studies in Honour of Hugh Richardson*, Vikas Publishing House Pvt Ltd, 1979, p. 139.
- (7) *rGyud sde kun bris*, Delhi, 1971, Vol. 21, No. 120. ちよこじは、カギュー派自身の著作ではなく、ターラナータ作。『チキョロゾ』に基くサキヤ派のロナル・フンがまとめたもの二冊である。
- (8) *Collected Works of Thang stong rgyal po*, 20 vols (予定) Thimbu, 1976—.

